

夢、目標大切に

これで生きる。

2013年スタート

感謝の気持ち忘れず

長引く不況で、先が見えないこの時代。人々は新しい働き方をどう見つけ、どう生きていけばいいのか。テレビや書籍で「仕事」について発言する小山薫堂さんと、女性起業家の支援を続ける菅原智美さんが語り合った。

(司会は共同通信編集委員・朝方伸二)

「仕事や働く」といって、日本の現状は？」

小山 比較してよって仕事している人が多い。「自分の仕事はあの人より良い」とか「去年より売れ上がった」とか、判断基準が常に外にある。問題は、常に成長を求める社会にある。マイナスを評価する姿勢があれば社会は変わると思う。

菅原 社員の不満は誰かと比べてどうか、というのが大半。給料を上げてもらっても誰かより低かったら不満だし、逆に安い給料でも仲間がいたら満足する。その原因として、夢や目標を持っていないことが挙げられる。

▽人との出会い

小山 日本人は「ぶれる」とは言いにくいと聞いているが、今はぶれないと生き残れない。バスケットボールのレポートのように、軸足は今の仕事に置いて動かさず、もう片方の足を動かしながら最良のパスを出す判断をすることが求められている。

菅原 女性の起業家を支援し

女性の活躍サポート

菅原



菅原智美 女性起業家 × 小山薫堂 放送作家

「海外進出でシニア」
「お二人の働くモットーは。小山 「俺たちは幸せだ」という父の言葉が僕のベースにある。父は「戦国時代なら、働くとは人を刀で斬ること。現代に生まれても、水をくむため毎朝2時間歩く国もあるんだ」とよく話していた。仕事で失敗しても戦国時代のように殺されないから、好きなことをやって人生を楽しむという思いがある。

菅原 新しい「エンタレ」にするのが好きで、起業した人から感謝され、私と会って「人生が変わった」と言われるのが嬉しい。喜ばれることをビジネスにできれば最高だ。

「これからの働き方、進むべき方向は。」
菅原 日本企業は海外進出していると言われるが、大半企業は海外があるだけで、中小企業はほとんど進出していない。海外では日本人が経営しているだけでブランドになり得るもので、中小企業のビジネスチャンスはいろいろある。日本の優れた商品やサービスを持って行って、海外でブランドになるべきだ。

小山 行先が定まっている人は自分の「こと」を考えていない。打破する方法として、自分のことを差し置いて、他人の「こと」を考えて行動してみてもどうか。そこに新しい出会いが生まれるきっかけがある。

小山 最近、シニア世代のことを僕は「ブランド・ジェネレーション」と呼んでいる。この「ブランド」がどれだけ上手



小山 薫堂 放送作家、形市の東北

「ぶれる」姿勢

「ぶれる」をやるのが、日本をもう一つ発展させるポイントだ。この世代がお金を楽しく使えば、日本の文化も向上すると思う。

例えば、神奈川県の大磯で60歳を過ぎた女性が自宅でカフェをやっている。大通りから入った住宅街なので、家族は「誰か来ないよ」と止めたが、売り上げは毎日の日がないくらい繁盛している。

▽ハードル不要

「就職難でスタートからつまづいてしまっ」
菅原 待遇が良いとか正社員でなくて駄目とか、ハードルを設けているからではないか。働く人を求めている会社はたくさんあり、ハードルを設けなければ仕事は見つかるはず。例でいいから仕事をしてみよう。パーセント本気で働いてみると、いろんなチャンスが生まれてくると思う。

小山 今の学生は、確実にい

菅原 智美氏(守がはら・ともち) 70年新潟県生まれ、リクルートなどを経て、07年、女性起業家の支援と資金調達を運営する「NATURALUCK」設立。全国で約500人の女性経営者が登録する会員制の「女性経営者エンジェル倶楽部」の代表理事。

